

# 市史通信

## 【目次】

- 記念絵はがきの世界  
—小澤コレクションから
- 軍事郵便と軍隊手帳を読み解く
- 高松宮賜杯のゆくえ  
—昭和二〇年代後半の市民体育大会
- 写真で見る昭和の横浜⑧  
昭和初期の個人均一店
- 所蔵資料紹介  
—横浜開港五〇年祭絵はがき
- 市史資料室たより



横浜高等商業学校 開校記念の絵はがき 大正15 (1926) 年9月 小澤コレクション  
当時国内に流行し始めていたジャズのリズムにも通じるデザインである。同校は戦後、横浜国立大学に引き継がれた。

## 第27号

【発行日】2016年11月30日  
【編集・発行】横浜市史資料室  
〒220-0032  
横浜市西区老松町1番地  
横浜中央図書館・地下1階  
【電話】045-251-3260  
【FAX】045-251-7321  
【E-mail】  
so-sisiryu@city.yokohama.jp  
【ホームページ】  
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/gyosei/sisi/>

## 記念絵はがきの世界

—小澤コレクションから

昨年度横浜市史資料室は小澤美那氏（山手資料館館長）から、横浜の絵はがき七二六枚の寄贈を受けた。小澤氏は、同館名誉館長で、絵はがきコレクターでもあった故平尾榮美氏に影響され、蒐集を始めたという。当室では、絵はがきの内容から、以下の区分で整理した。

- ・ 学校関係：五五件（二八六枚）
- ・ 開港五〇年祭：一一件（五六枚）
- ・ ペリー関係：四件（一五枚）
- ・ 船舶：三三件（七八枚）
- ・ 花電車：五件（二二枚）
- ・ その他：七六件（三六一枚）

この一八四件のうち、八一一件に封筒・畳紙が残っており、六件は封筒・畳紙のみである。すべての組絵はがきがそろっているわけではないと思われるが、封筒・畳紙が残っているのは絵はがきの由来を知るためには貴重である。当室は絵はがきのコレクションが乏しいので、ありがたい寄贈であった。

明治に創設された郵便制度では官製はがきのみ使用が認められていたが、明治三三（一九〇〇）年九月一日の「郵便規則」によって、私製はがきの使用が可能となった。すでにあつたコロタイプ印刷などの写真印刷法と結びついて、絵はがき製作が広まり、絵はがき屋が誕生することになった。稀に一九

世紀の写真が使用される例があるものの、日本において絵はがきとは、二〇世紀を撮したメディアであった。

明治後期～大正期を中心に製作された、モノクロ風景絵はがきに水彩絵の具で色づけした彩色絵はがきは美しく、みやげものとして相応の価格で提供でき、高価な彩色写真を過去のものにしていった。そればかりでなく、『絵葉書世界』『日本絵葉書月報』などの情報誌が、明治末～大正期に発行され、蒐集品としても大いに需要されたことがわかる。これらは「売りもの」の絵はがきを対象としたものであった。昭和期に入ると、カラー印刷が普及して手間のかかる彩色絵はがきに代わっていくが、水彩絵の具の淡い色合いが失われてその魅力が削がれていく。また、印刷されただけのモノクロ絵はがきが多くを占めるようになる。昭和期に入ると絵はがきを作る側・あつめる側双方の熱が冷めていくようでもある。そして、個人が自身のカメラで風景を撮すようになる戦後の高度成長期以降に、絵はがきはメディアとしての役割を終えている。

小澤氏のコレクションは、以上のような「売りもの」の風景絵はがきも含まれているが、その多くは、関係者に記念品として手渡す目的で作られた「配りもの」の絵はがきであることに特徴がある。そのような記念絵はがきは、製作者の意図と配布対象が比較的是っきりとされていることから、歴史資

料として価値が高い。

しかし記念絵はがきがすべて関係者に配られたものであるか、留保が必要である。なかには一〇枚組のような大部なものがあるからである。記念行事を撮し、のちに関係者から註文をとった場合も考えられるからである。いずれにせよ配布対象が多数になるにつれて、絵はがきの単価は安くなっていく。手頃な記念品として、ほうだいな種類の絵はがきが残されている。

### 学校関係絵はがき

小澤コレクションの内、「その他」をのぞく分類で最大のものは、学校関係の五五件、一八六枚である。このうち、判明するかぎりでもっとも古い絵はがきは、「尋常第二戸部小学校開校式記念」の明治三九（一九〇六）年一月二十七日の記念印のあるコロタイプ印刷の一枚である（図1）。第二戸部小学校は開校二年めに、尋常西平沼小



図1「尋常第二戸部小学校開校式記念」絵はがき  
明治39（1906）年10月27日。  
右の人物は、のちに横浜市長となる平沼亮三。



図2「西平沼尋常小学校開校記念」絵はがき  
大正12（1923）年4月 校舎は大正3年建築されたもの。

学校と改称。大正三（一九一四）年に火災で七教室を失い、同年木造二階建てに改築した。関東大震災直前の大正一二（一九二三）四月に西平沼尋常小学校となり、震災後の一三年に西平沼尋常高等小学校となった。昭和三（一九二八）年に鉄筋三階建ての復興建築に変わり、昭和六年に平沼尋常高等小学校となった。コレクションには、さらに震災直前の西平沼尋常小学校開校記念絵はがき（図2）や、復興建築の校舎の絵はがきもある。

関東大震災で校舎が倒壊し、仮校舎での授業をへて、復興建築として校舎が新築落成した際も、記念絵はがきがつくられる契機となる。コレクションには横浜、戸部、西戸部、老松、元街の各尋常高等小学校の分がある。このうち、戸部小学校には、震災直後の露天授業の一枚も含まれている。

西前小学校の絵はがき四枚は、袋・畳紙がないのであるが、昭和一五（一



図3「山手丘陵に立てる横浜紅蘭女学校」大正14（1925）年  
総工費38万円余、鉄筋3階建ての震災復興建築は「モダン・フレンチ式」と評された。同校は戦後横浜雙葉中学校・高等学校となった。

九四〇）の紀元二千六百年を祝賀して、創立当時の校舎、震災直後の仮校舎、復興校舎の三校舎と、祝賀大運動会のセットで作られたものようである。横浜高等商業学校は、関東大震災復興のさきがけとして、予定より一年早めた大正一三（一九二四）年四月に弘明寺の横浜高等工業学校の仮校舎で授業を始めた。その後、南太田富士見台に新校舎の建設をすすめ、大正一五年一〇月二日に開校式が挙行された。その記念絵はがき〔前頁図版〕は、新築校舎の講堂を中央にして、そのまわりにアルファベットで、「Export」「Import」「Raw silk」「Tea」「AMERICA」「Yen」「Taisho」などの貿易につながるアルファベットの文字や、船舶、碇、烏帽子（？）の図柄がちりばめられている。モノクロ図版で紹介するのは惜しいが、モダンをこえて、ポップと形容してもよいようなデザイン。新校舎を手に入れた高揚

感が感じとれる一枚である。その他、紅蘭女学校の絵はがき三枚は、カラー印刷の精度がとくに高いもので、絵はがき製作に注ぐ意気込みが感じられる（図3）。以上は、校舎の落成絵はがきである。神奈川県立第一横浜中学校（神中）の記念絵はがきは、開校一五年記念から四〇周年記念までにいたるまでのものが断続的に八種類あるが、これらは周年記念絵はがき。また、昭和二（一九二七）年一〇月の「横浜小学校秋季大運動会記念」の袋書きのある一〇枚組はイベント記念絵はがきであるが、先述のとおり「売りもの」の可能性もある。

### 新道建設記念とその製作者

「磯子青年会道路開通記念」の袋に入った八枚組の絵はがきは、『磯子の史話』（一九七八年刊）に「岡村道」と題して「岸留蔵さんの話によると大正のはじめ、旧道から岡村へ通じる道を開くべきだと力説し、梶が谷弥吉さん小池宗八さんらと発起人となって奔走し道路用地は地主に寄付してもらって、青年会の事業とし、約半年ばかりで、トンネル口からプリンスホテル前を経て岡村までが完成したのです」（五八九頁）とある、道路建設記念の絵はがきである（図4）。

江戸時代から続く「若衆」「若い者」などと呼ばれた地域の若者集団は、日露戦後、大正期に、内務省や文部省の指導で「青年会」「青年団」の名の下

組織替えされ、社会に有用な集団になることを求められた。その具体的取り組みの方法は地域によって様々で、地元の名望家や学校教員たちが、若者の自発性を喚起できる事業に結び付けることができるかが重要な鍵となった。新道建設は、磯子と同時期の明治四五（一九一〇）年から約二年がかりで、金沢区柴の青年会員も取り組んでいる（『蒼穹の下魚鱗耀きし地—柴漁業協同組合史』一九九〇年刊、第四章）。全国的にみても大正五（一九一六）年に始まった明治神宮の造営は、造営局総務課長田澤義鋪たざわよしかほの発意で全国の青年

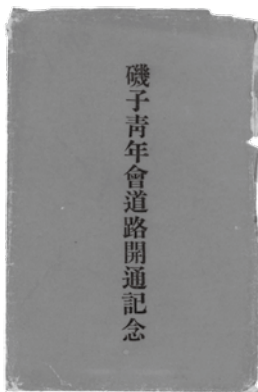


図4 「磯子青年会道路開通記念」 絵はがきの袋（左）と、測量当時の青年会員（右）  
大正初期 道路工事そのものは、建設業者が請け負っていることが他の絵はがきから推測される。



図5 「磯子町新道入口」と題された絵はがき  
大正初期

団に呼びかけ、道路建設や植樹に勤勞奉仕させた。この田澤の呼びかけに全国からのベ—一万人が東京に集まり、青年層の社会的価値を知らしめる重要な契機となった。この記念絵はがきは、磯子での青年会の取り組みを証明する貴重な歴史資料である。

それでは、だれがこの記念絵はがきを作成したのであるか。新道は雑木林を切り開いて建設されている。そのおりに刈り取られた樹木類は、家庭燃料として販売して、青年会の活動費となる。それを元に青年会が作ったものであるか。しかし比較的大部な八枚組である。用地を提供し、名所である岡村天神とむすんで、沿線の付加価値を高めて、地価の上昇が見込まれる地主が、地域おこしに一役かった青年会のために作り、記念としたものであるかもしれない。「磯子町新道入口」（図5）に自動車・運転手とともに収まっている、三人の人物があるいは…、

と想像されるのである。

#### 横浜新興倶楽部

神奈川県匡済会きやうさいかいは、大正七（一九一八）年八月に発生した米騒動への対処としての米販売を契機として、横浜市や神奈川県のの主導のもと、市内の資産家をあつめ、翌大正八年に設立された社会事業団体である。まもなく創設一〇〇周年をむかえる。

神奈川県匡済会が取り組んだ事業は多様であるが、施設関係では、労働者宿泊所としての横浜社会館・川崎社会館の建設・運営、沖仲仕休憩所、鶴見と川崎の公設市場の建設があった。とくに大正一〇（一九二一）年五月に鉄筋コンクリート造三階建ての偉容をもってオープンしたのが横浜社会館で、関東大震災での倒壊をまぬがれた。その横浜社会館は、昭和七（一九三二）年に「横浜新興倶楽部」と改称されて低所得勤勞独身者のためのアパートと



図6 「横浜新興倶楽部 公衆食堂」 昭和7（1932）年

なり、労働者宿泊所は長者町に移転することとなった。

横浜新興倶楽部は、一階に公益浴場と公衆食堂（図6）をそなえて、一般利用にも供していた。社会事業図書館と親睦の場としての社会事業倶楽部も開いていた。

『神奈川県匡済会七十五年史』（一九四四年刊）によれば、新興倶楽部には、一〇〇を超える個室があり、四畳半・六畳・一二畳の広さの別があった。（図7）の居室は、畳敷きの部屋に机と椅子、テーブルと椅子が置かれているモダンなつくり。最大の一二畳であろう。「低所得勤勞独身者」を対象としたアパートであるとはいえ、入居者は学校教員や官庁関係者が多かったという。

本稿で事例として紹介した小澤コレクションは、平成二九年一月からの横浜市史資料室ミニ展示で披露したのち、すべての絵はがきを複製で公開する予定である。

（平野正裕）



図7 「横浜新興倶楽部 居室」 昭和7（1932）年